

1 研究主題

他者とのかかわりを大切にする子どもを育てる総合的な学習の時間の指導
～ 協同的に取り組む和太鼓の活動を通して～

2 主題設定の理由

(1) 今日の課題から

現在、我が国の教育は大きな転換期にある。変化の激しい社会や様々な社会問題の中で、子どもたちにとっては生きづらい世の中になることが予想される。だからこそ、その社会の変化に押しつぶされたり、押し流されたり、身をまかせerのではなく、自ら考え、判断し、行動を選択し、その行動に責任を負うことのできる自立した大人に成長していくことが何よりも期待される。また、人間は一人だけでは生きていくことができないことを考えると、知恵を出し合い、助け合い、高め合っていくという、自立の上にたった共生も生きていく上で必要である。話す力は持っている、話し合う力に欠けていては、社会生活は困難になる。自立と共生という二つの力を子どもたちに身につけさせた上で、「協同的に取り組む」ことは意義深いと考え、本校では平成15年より総合的な学習の時間において和太鼓の取り組みを行ってきた。

(2) 子どもたちの実態から

めまぐるしく変化していくこれからの社会で、自立的に生きていく上では、判断力・思考力・表現力が欠かせない。しかし、OECDのPIISA調査等から、我が国の子どもたちは思考力や判断力、表現力に課題があることが明確になってきている。また、テレビゲームやインターネットの普及により、疑似体験ばかりが多くなり、実体験が乏しくなっている。本校の子どもたちも、日常生活を見ると、何か課題にぶつかったとき、自分で考えて解決しようとしたり、友だちと協力して解決しようとしたりすることができない場面が多く見られる。また、子どもの孤独化傾向や反対に集団埋没型傾向が著しくなってくるにつれて、個が集団に飲み込まれたり、逆に反発し合ったりする傾向が見られるようになってきた。自分の思いや考えを表現することができず、友達との人間関係を構築できない子どもが多い。そこで、研究主題に「他者との関わりを大切にする子どもを育てる総合的な学習の時間の指導」を掲げ、副主題を「協同的に取り組む和太鼓の活動を通して」と設定した。協同的に取り組む集団の中で、思考力や判断力、表現力を身につけさせていくことは重要であると考えた。

3 主題の意味

(1) 他者とのかかわりを大切にすることは

他者とのかかわりを大切にすることは、お互いに協力して物事を作り上げようとして、思いや考えを伝え合おうとしたりする中で、他人のよさがわかり、違いを認め尊重することである。

(2) 協同的な学びとは

協同的な学びとは、お互いに力をあわせ、助け合いながら学習を進めていく集団学習である。協同的に学ぶために子どもたちは、お互いに顔を合わせて語り合い、継続して共同作業をすることが必須である。

4 研究の目標

他者とのかかわりを大切にすることを育てるために、協同的に取り組む和太鼓の活動を取り入れた総合的な学習の時間の指導法の究明

5 研究の仮説

総合的な学習の時間において、子どもが協同的に取り組む和太鼓を取り入れた学習課程の工夫をすれば、他者とのかかわりを大切にすることが育つであろう。

6 研究の計画（授業の計画）

(1) 単元 「新しい伝統をつなげよう」(5年生・6年生)

(2) 単元の目標及び活動計画

| 単元 | 「伝統を引き継ごう」 | 5年生 | 総時数 | 35時間 | 時期 | 10～3月 |
|------|---|-----|-----|------|----|-------|
| | | 6年生 | 総時数 | 55時間 | 時期 | 年間 |
| 単元目標 | <p>和太鼓の体験活動を通して、その道の専門家の生き方や考え方を感じ取り、自己の生き方を振り返ろうとする。(自己の生き方)</p> <p>和太鼓の曲作りを行うなかで、自分の役割を自覚したり友達のよさに気づいたりすることができる。(コミュニケーション能力)</p> <p>和太鼓を発表する場を設定することで、積極的に自己を表現しようとする。(主体的な表現)</p> | | | | | |

5年生

| 過程 | 主な活動内容 | 指導上の留意点 |
|-----|---|--|
| つかむ | 6年生の和太鼓の練習を見学する。 (1時間) | ・和太鼓の音だけでなく、6年生の顔の表情や動きにも着目させ、和太鼓の技術だけを学んでいくのではないことを意識させる。 |
| | 和太鼓の歴史やどのようなときに使われたのかについてグループごとに調べる。 (2時間) | ・調べたことについて交流させる。 |

| | | |
|--|---|--|
| | 6年生に教えてもらいながら、自分のバチを作る。 (2時間) | ・6年生とのペアを作り、作り方や道具の使い方を教えてもらいながら作業させる。 |
| | 6年生に教えてもらいながら、実際に和太鼓に触れてみる。 (2時間) | ・6年生から教わる中で、自分なりにわかったことを記録させ、次の活動から、友達と伝え合って活動することを確認する。 ・和太鼓やバチの扱い方について、安全上注意する点を確認する。 |
| | 6年生から習ったことをグループごとに練習する。 (2時間) | ・前時の学習で6年生に教えてもらったことをグループのなかで伝え合い、お互いがたたき方をチェックしたり教え合うようにする。 |
| | GTと6年生から曲を習う。 (2時間) | ・一斉、グループ、個と形態を変えながら学習させる。 |
| | 曲の練習をする。 (12時間) | ・グループごとに友達同士で教え合いをしながら練習させる。 |
| | 6年生を送る会に向けて6年生と一緒に練習する。 (6時間) | ・6年生の指示のもとで練習に取り組ませ、わからないことは積極的にきくようにさせる。 |
| | 6年生を送る会で曲を発表するとともに、6年生の最後の演奏を聴く。 (2時間) | ・6年生と一緒に演奏したり、最後の演奏を聴くことで、次学年での自分たちの役割について考えさせ、交流させる。 |
| | 6年生が演奏した曲を引き継ぐ。 (4時間) | ・わからないことや難しいことは積極的に6年生に尋ねるように声かけをする。 |

6年生

| 過程 | 主な活動内容 | 指導上の留意点 |
|------|-------------------------|--|
| 追求する | たたき方の確認、復習をする。 (2時間) | ・6ヶ月後には自分たちが5年生に教えることを意識させ、基礎・基本をしっかりと復習させる。 |
| | 1 運動会に向けて、引き継いだ曲の練習をする。 | ・引き継いだ曲をそのまま演奏するのではなく、声のかけ方やバチさばき、体の動きなど自分たちで話し合わせて工夫させるようにする。 |
| | 2 自分たちで曲をつくる。 (22時間) | ・曲づくりは一人一人が考えた節を実際にたたきながら考え、GTと話し合いながらつくっていくようにする。 |

| | | |
|----------------------------------|---|---|
| 伝える | 運動会で発表する。 (1 時間) | ・発表での目標を一人一人に決めさせて本番に臨ませる。 ・ふりかえりをさせる。 |
| | 地域行事や出前演奏に向けて練習をする。 (8 時間) | ・2回目、3回目の演奏となるので、聴く人に太鼓の音でどんなことを伝えたいか意識して練習させる。 |
| | 地域行事や高齢者支援施設で演奏を行う。 (2 時間) | ・自分の演奏についてふりかえりをさせる。 |
| | 5年生に伝統を引き継ぎに向けて話し合いを行う。 (1 時間) | ・5年生にどんなことを伝えたいか、どんな教え方すればよいかをグループごとに話し合わせる。 |
| | 1 5年生にバチのつくりかたを教える。 | ・のこぎりなどの道具の安全面に気をつけさせる。 |
| | 2 5年生に太鼓のたたき方や曲を教える。 (4 時間) | ・5年生とペアをつくり1対1で教えさせる。 |
| | 6年生を送る会に向けて練習する。 (1 0 時間) | ・一斉、グループ、個と形態を変えながら練習させる。 ・練習と話し合いを繰り返しながら活動させる。 |
| | 6年生を送る会で演奏する。 (1 時間) | ・自分の演奏についてふりかえりをさせる。 |
| 5年生に1年間取り組んできた曲を伝える。 (4 時間) | ・一斉、グループ、個と形態を変えながら5年生に教えさせる。 ・教えるリーダーを決めておき、リーダーの指示のもとで教えさせる。 | |

7 指導の実際

(1) つかむ段階「興味・関心を高める」

はじめに、興味・関心を高め、これから取り組んでいくことを意識させるために、6年生の練習を見学させた。1年生から4年生までの間に、運動会や6年生を送る会などで6年生がたたく和太鼓の音に触れてきたこともあり、和太鼓に対する子どもたちの興味・関心は非常に高かった。その中で6年生の練習の見学をしたことは、和太鼓に対する興味・関心をさらに高めることにつながった。



資料 1

6年生の練習の見学

さらに、自分たちが今から取り組んでいく和太鼓について調べたことも興味・関心を高めることにつながった。また、6年生からバチ作りを習うことで、伝統を引き継いでいく意識を持った



資料2 バチ作り

(2) 追求する段階(5年生)「6年生とかかわる」

5年生の追求する段階では、まず、実際に和太鼓に触れるという体験をさせることにした。GTとの打ち合わせをした上で、技術的なことや理論を伝えるのではなく、まず、実際に音を出してみることで、子ども自身から和太鼓について追求したいという気持ちを持たせることにした。6年生から教えてもらう場面では、6年生のたたく音と自分のたたく音を比べたり、たたき方の違いを見つけたりして、子どもたちは意欲的に取り組んだ。



資料3 6年生から教えてもらう

その後、5年生だけの練習では、協同的に取り組むことを意識させるためにグループを作り、6年生から習ったことを教え合ったり、確認したりしながら活動した。また、6年生を送る会という発表の場を設定することで、子どもが目標を持った。また、6年生と曲の練習をする中で協同的な取り組み方についても学ぶことができ、6年生とのかかわりを持つことができた。

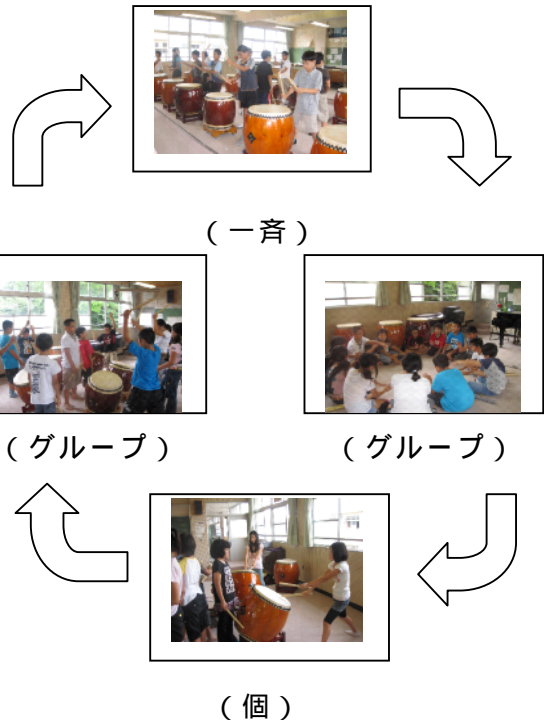


資料4 6年生を送る会

(3) 追求する段階(6年生)

「GT・友達とかかわる」

6年生の追求する段階では、実際に、協同的に取り組ませることに重点をおいた。練習では、「一斉 グループ 個 グループ 一斉」という学習形態を習慣化させ、学習形態が変わるごとに話し合い活動を入れるとともに、グループでの練習の中でも話し合い活動を入れながら学習を進めた。話し合いの中で、自分の考えや思いを表現したり、友達の技術や考えを認めたりしながら、グループごとの曲を作り上げていった。また、GTからの直接指導の際に、GTの和太鼓に対する思いや取り組む姿勢、和太鼓の演奏を通してどんなことを学んでほしいかなどについて話を聞き、それぞれが5年生に引き継ぐ時の自分の姿を想像し、目標を決めることができた。



資料5 学習形態の工夫

(4) 伝える段階「保護者・地域とのかかわり」

伝える段階では、4つの発表の場を設定し、その場ごとにめあてを考えさせた。まず、運動会では、初めての発表ということで子どもたちは緊張していたが、GTからのアドバイスなどからグループで「楽しんで堂々と演奏する。」というめあてを設定し本番に臨んだ。本番に向けて、保護者の方々がボランティアで子ども一人一人に法被を作ってくれたこともあり、子どもたちは保護者に見てもらいたいという思いを強めた。しかし、演奏後の子どもたちの自己評価は、やはり自分自身の演奏の出来に関するものが多く、友達のことを認めることや全体での活動に対する評価はほとんどなく、保護者に対する感想もなかった。

2回目の発表は地域行事での演奏となったが、この発表にはGTが参加できないということで、子どもたちだけでの演奏となった。そのため、子ども同士で話し合わせる時間を多めに取り、練習に取り組みさせた。地域の行事ということもあり、子どもたちは、「自分たちの力で演奏を成功させ、地域の人に自分たちの太鼓の音を聞いてもらおう。」というめあてを設定した。演奏後の感想で、友達との音合わせのことや、自分のグループとは違う友達の良い点を書いている子が数人見られた。GTがいない中で演奏するということが、協力しなければならないという子どもたちの意識を高めることにつながった。また、地域の方や保護者に聞いてもらえるために努力したことや工夫したこと、見に来てもらった喜びについて自己評価の中に書いている子どもが半数近くいた。

3回目の発表は、校区の高齢者支援施設で行った。今回の発表では、さらに子ども同士の協同的な取り組みを活性化するために、道具の搬入、進行、演奏もすべて子どもたちで行わせた。話し合いの中で、友達の良いところを出しながら役割を決めていき、全員が演奏以外の役割を持って本番に臨んだ。演奏後の感想では、友達のよさを認めることはもちろん、ほとんどの子どもが全員で成功させた達成感について書いていた。また、ほとんどの子どもが施設の高齢者の方とのふれあいや感動してもらえたことについてふれていた。

最後の発表となった6年生を送る会では、会に向けて5年生にこれまで取り組んできたことを伝えていく中で積極的にかかわろうとする姿が見られた。また、下級生に自分たちの取り組みをどのように見せるかという相手意識を持ち臨むことができた。

8 研究のまとめ

今回の研究では、「他者とのかかわりを大切にする子どもを育てるための総合的な学習の時間の指導法」を究明するために、協同的に取り組むことができる体験活動として和太鼓を教材化した。実際の授業では、つかむ 追求する 伝えるという3つの段階に分けて指導を行った。それぞれの段階ごとに子どもの変容をイメージし、子どもに目標を持たせたことで、子どもたちはその目標に向かって意欲的に取り組むことができた。子どもたちにとって初めての体験である和太鼓は、協同的に取り組まなければ成功しないことが多く、それを解決していく中で、協同的に取り組むことの有用感を子どもが味わうことができた。また、段階ごとにお互いを認め合う場面が増えていった。

以上のことから、体験活動として和太鼓を教材化したことは有効であったと考える。

9 成果と今後の課題

【成果】

- ・ 体験活動として和太鼓を教材化したことで、子どもたちが興味・関心を持ち、意欲的に取り組むことができた。
- ・ 授業の中に話し合い活動を位置付けたことにより、子どもたちは自己を表現することができるようになった。
- ・ 協同的に取り組む場面を多く設定したことにより、友達の考えや思いを受け入れることができるようになった。

【課題】

- ・ 6年生での授業の時間数が55時間とかなり多かった。23年度から完全実施していると新指導要領の中で、音楽などの他教科との関連を持たせ、時間数の工夫をしていく必要がある。
- ・ GTから指導を受けながら活動を行ったが、GTと綿密な打ち合わせをする時間が少なかった。
- ・ 技術的な面も含めて、GTに依存している面が多かった。今後、GTの指導は受けながらも、できるだけ子どもが後輩に引き継いでいけるように5年生と6年生の連携を強めていく。

参考文献

- ・ 「小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編」 文部科学省 東洋館出版
- ・ 「『総合的な学習の時間』推進のために」 福岡県教育委員会
福岡県小学校「総合的な学習の時間」研究会
- ・ 「総合的な学習の時間のための教材化集『しっちゃんかい!』」
福岡県教育庁筑豊教育事務所
- ・ 「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開」 文部科学省
- ・ 「『生きる力』を育てる本」 - 協同学びのすすめ - 福岡教育大学附属小倉小学校